

## ある人の最初の種馬鈴薯

開拓当時は、誰れでも食糧の自給をと一生懸命になって働く。こんな話がある。

上湧別の屯田農家から買い入れた種芋を、旭峠の陰の沢を、春になる前の堅雪の上を背負って、今の共立まで来たというから。大変だったろう。

その人は、冬のうちに、食糧を蒔く予定の場所の立木を切って片付けてあった所に、その種芋を植えた、その人が背負って上湧別から運んだ種芋は、量にして大した畠の面積は要らない位いなので、大木の伐根の張根の間に手寧に蒔いた。大木の張根の間は、何百年も繰り返して落ちた落ち葉が腐っているから作物でも、雑草でもよく出来るから、少しの種芋等にはよい場所だった。

種芋蒔について、数日経ってから、備蓄食糧を少しでも喰い伸ばすために、ふと考えたのは、蒔いた種芋を掘り出して、皮の芽のところを厚くむいて、食べるために中味を取って、その芽のついた皮を蒔き植えたのが、その年の秋大量に馬鈴薯が稔ったという。大木の何百年の落葉が肥料となったのも、役立つことだ。

馬鈴薯を、開拓当時は、五升芋と言ったが、一株で五升程穫れたからそう言ったとか。

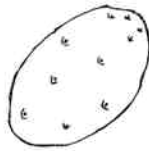
開拓当初の人々の、生活についての食料は、どんなにか確保のために、真剣であったかと

いうことが伺はせられる。一回蒔いた種芋を掘り出して、芽の付いたところの皮を厚くむいて蒔いても、土地の肥えているところでは、大量の収量があるし、冷害にも強いのが北方に位置する佐呂間辺りの、適作物で昔から大切な食料であった。

馬鈴薯についての説明は、改めて説明しなくてもよいでせうが、茎の付け根のところは芽の間隔が遠いが、反対の端の方に小さい芽が多い目についている。土の肥えているところなら、一つ一つの芽を切りはなして蒔いてもよいから、大人の背うだけの種芋でも、大木の伐根の間々に可成り蒔くことが出来たことだろう。

語り手

栄の小松のぢいさん  
文責 実盛 雅夫



## 一寸米借りりに片道四時間



杉谷安蔵さんがこんな話をしたことがあった。昭和二三年はあの敗戦後の、未だ未だ食糧の不足しているころ。浜佐呂間の漁業者は米等手に入れるのは、闇米を高い値で買わされていた頃のこと、杉谷さんは

実盛さん。戦時中も戦後も、私共が川口と言っていたころ、今の浜佐呂間に来たのですかね。あの頃を思ふと、今は（昭和二三年）まだまだよい方ですよ。

昔は、開拓に関してとか、山林についてとか、学校等について、網走支庁の役人や、常呂役場からとか、営林署関係等北見から関係の用件で来るときは、事前に郵便で通知が来る。そうしたら泊らせて、夕食と朝食を食べさせ、帰りには弁当を持たせるのだが、私が川口に来ての始めの頃、大事な用件で役人が

来る知らせが来た。私共まだ米等盆と正月位いしか喰べられない時代だから、全く米は無かった。

中佐呂間の駅通の、栄さんのところならあるだろうと思ひ、米四升(七・二立)程借りに、片道四時間かかるところを、米を借りに行つたが、途中の道がまたひどいものだった。ひどい水溜や、あちらこちらからの山から流れ出る、沢水が道を横切つてるところ、全くひどいものだった。その途中に開拓に入つている人は、その水溜りに。あの頃沢山あつた、丸太や薪をその水溜りに入れて、馬で土籠を引かせたりして、荷物を運んでいたが、その悪い道を又、米を返すため、常呂の市街まで行き、米を買つて来て、中佐呂間の栄さんのところまで、返しに行くのだが、戦後二・三年経つた今は、常呂から中佐呂間まで、乗り合いバスが通つている。米も戦後豊作続きで、闇でいくらでも手に入れるしね。

昔の大事な役人さんが来るとなると、それはそれは大変だった。当時の僻地の人は。何しろ、役人さんを大切にしなければ成り立たなかつたからね。

役人さんの、気分を良くすることで、あの当時の、様々な大事な用件が、スムーズに片づくこともあるが、開拓当時の役人は、今の役人より偉い人だったからね。

語り手 杉谷 安蔵  
文 責 実盛 雅夫

## 中佐呂間駅通用の 放牧場の管理の女<sup>ひと</sup>

中佐呂間駅通所が、明治三六年に業務開始したとき、交通機関の主役は馬であつた。中佐呂間駅通所の馬を放牧し、自然交配で増殖するための放牧場が、北区にあつたことのおもしろい話を、北区の初貝直一さん(明治四二年生)と土田シカさん(大正四年生)に平成三年七月二十一日に、この二人からくわしく聞くことが出来た。

現在の、佐呂間市街の下手の方に駅通が出来たと同時に、駅通の用地(開基からの変化の地図項目に)が、駅通所近くに国の規定による用地の外に、北区の放牧場が、北区の三十号から一百分(百間―百五十間)、西に百間行つたところの、六線道路から北方に二四万坪八〇ヘクタール分有つたとのことであつた。

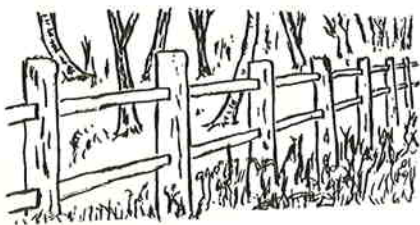
其の放牧場の柵は、きちつとした杭を打ち込んで、横の柵棧は、ノミで掘り込んで通してあつた程のものだった。

「私達の小さい頃、栄さんの奥さんが、旅人に貸す馬が急に沢山必要になると不足分を、北区の牧場まで不足分の数だけつかみに来る。駅通のところの常備備え付けの馬は直ぐに、人の言うことに応じるように始終馴らされているが、北区の牧場の馬は、臨時の場合位い

しか人に使われず、中には、四・五才位になるまで人がさわらない馬もいたから、急に沢山の馬が必要になつても、北区の牧場の馬を臨時的に使うには、馬に素人の人は大変だった。そんな人馴れしていない馬を、栄さんの奥さんは、駅通の常備の馬に乗つて、北区の牧場に来て、旅の人の必要な馬の数だけロープを使って集めるのだが、見事な手裁きで次々と馬を綱に繋いで終うのだったよ。あの栄さんの奥さんの馬に対しての扱いは、本当にどこにそんな力業があつたのかと、今でもつくづく思いますね。

文化から程遠い人々の、大自然の中の生きるための、生活の智慧の熟練が、栄さんの奥さん(現在までの記録にない人)の、佐呂間を通つて次の目的地に行く旅人に対しての奉仕(今なりに言えばボランティアか)だがこの様に、隠れた不思議な力を持っていた女のひとが、いたことが掘り起こされたことも何か、現代のように、機械文明に入り込んだ佐呂間町に、大自然相手を大事な駅通(公的機関)に携つた女の方のエピソードを書いて見ました。

語り手 初貝 直一  
土田 シカ  
文 責 実成 雅夫



## 丸山峠頂上まで鑑沸村

△注、小島善之丞氏より頂いたメモに、大正四年四月一日、鑑沸村の村界は、栄浦（実の旧鑑沸）岐阜は常呂村となる。野村牛村、生顔常村分村、生顔常村（現留辺薬町）は武華村となる。佐呂間村、武華村の村界は、サロマベツ原野五五号と改める△とあったので、生顔常村とは（別記事。村名字名の変遷）にカナで書いてあるがもう一度記してみます。（ムエカヲツネ村）と読む▽

小島氏の調査に依れば、大正四年まで、現在の佐呂間町と、留辺薬町の境界が、端穂を越して向うの丸山峠までが、鑑沸村ということになる。成る程と私が思うのは、五号駅通が「佐路澗駅通」と呼ばれていた意味も、これで判るような気がする。

それで、確認のため、留辺薬町元郷土史研究会長に、会って聞いて見たら、次の様な話をしてくれた。

「昔の地名で言えば、こんがらがるから、現在の地名で説明するが、記録によると、明治四年八月に、ムエカヲツネ村（留辺薬町が含まれる）やトウフツ村（佐呂間町含まれる）の地名が、△常呂村外六ヶ村誕生▽とある中に書かれているからには、地図等も出来ていたのかも、その鑑沸村が、現在の丸山峠まで伸びていて、大正四年四月一日に、行政面を

実情に合せ、合理的に現在の様にしたのである。ね。

だから、五号佐呂間駅通は、現在で言う佐呂間管轄であったことになる。だから△佐路澗▽の字を当てたのでせう。」

「武華村（現留辺薬町）も、鑑沸村が常呂役場から行政が独立した大正四年に、野付牛から、行政の独立をしているのです。ここでついでだから、面白い話をしてみませう。」

### 生顔常村と鑑沸村行政境界について

留辺薬町元郷土史研究会長、谷口重雄氏が現在の、佐呂間と留辺薬との、実さいの行政上の境界は、現在の丸山峠に佐呂間の方から向って、右側が野付牛村の行政区域になっていて、左側が鑑沸の行政区域となっていた。

それは、現在の、佐呂間の中に道路がないため、五号佐路澗駅通を、野付牛役場が行政上手掛けていたので、五号峠まで含めて四号峠の頂上までの、中央道路が境界だったことになる。四号峠は現在の丸山峠なのです。それで、峠の頂上から、少し留辺薬側に下った落葉松の中に、四号駅通跡と記した石碑を、留辺薬町が建てたのです。

中央道路が出来たのは、明治二四年で、五号佐路澗駅通が出来たのが、明治二五年三月一六日だから、明治二五年から、大正四年まで五号より上に向って、右側が野付牛の行政区域というわけだった。

遠藤藤太郎 遠藤藤太郎（五号佐路澗駅通最後の管理人）

が、留辺薬町元郷土史研究会長谷口重雄氏に話したことであって、実際に五号佐路澗駅通に管理人が入って来たのは、明治二八年であったというから、行政的取り扱いは、明治二八年からであったろう。その一番最初の管理人は、永井友吉という人であったという。

現在佐呂間町で、開基としているのは、浜佐呂間に、明治二七年に鈴木甚五郎という人が来てからであるから、五号佐路澗駅通に入ったのは、佐呂間町開基の一年後ということになる。

開拓の始まりは、何処の地域にも現在の常識では、意外なことが多いが、丸山峠の名が決定するまで、佐呂間の人には、留辺薬峠と呼んでいたし、留辺薬の人は、佐呂間峠と呼んでいたと言う。

谷口氏の話では、鑑沸側に又がって、端野屯田兵の財産としての山林が有ったと言う記録が有るなどのことは、佐呂間の人には、珍しい話関係は別として、歴史の中のこと一寸行数の中に入りました。

語り手 小島善之丞

谷口 重雄

文責 徳永 良行